



No. 161

ティーブレイク

## Tea Break

金魚すくい

会員 正林 真之

夏の風物詩の金魚すくい。実はあれにもコツがあり、それをマスターすることで、かなりの匹数の金魚をすくうことができる。また、獲得した金魚というのは、大抵は直ぐに死んでしまうものであるが、これにもやはりコツがあり、それさえ守れば結構長生きするらしい。

例えば、水道水をそのまま使わないことはもちろんのこと、袋の水温と水槽の水温の関係など、インターネットで調べても、それなりの情報が得られる。けれども、その殆どはやはり、かなり面倒な作業を伴うものである。

郷里の七夕祭り。千葉の地元ではそれなりに有名であり、かつては大勢の人で賑わっていたが、昨今の人口減少、地方経済の衰退により、次第に観光客の数が減りつつある。けれども、都会でそういったものを見たことがない子供たちにすれば、それこそわくわくする光景である。

よくよく思い起こしてみれば、自分が子供の頃も、胸躍らせて、祭りに出かけたものである。

東京で言えば、ちょっとしたイベントや靖国祭りのようなものでしか出ない金魚すくいが、通りのあちらこちらに見える。子供たちは歓声を上げる。そして、当然のことながら、やりたいと言い出す。

こうしたときに、都会であろうと、田舎であろうと、親の言うことは同じである。「どうせ捕れないし、捕れたとしても直ぐに死んじゃうんだから、やめときなさい...」

けれども子供は納得しない。後先のことを全く考えなくてよいのは子供の特権でもある。結局親が折れて、「じゃあ、一回だけ。一回だけだからね」ということになる。

すくっている子供を見つめる。当然のことながら、なかなかすくえない。そうこうしているうちに、網が破れて終了。初心者なのに大物を狙うのだから、当たり前である。けれども、またもう一回ということで、渋々それを許す。

そうしているうちに、なぜかコツを掴んだらしく、捕れた。

偶然というか、ビギナーズラックというのは恐ろしいもので、娘が捕ったのは、大型の黒の出目金であった。コツを掴んでいる者として、なかなか捕れない出目金。しかもこいつは本来的に弱く、飼育するのが極めて難しい。

どうせ東京に持ち帰ったところで、明日までしか生きない。いや、もう今夜中に死んでしまうかもしれない。なので娘には、「その川の川に逃がしてやりなさい...」と勧める。けれども、当然のことながら娘は「いやだ」と言い、親子の間で悶着が起きる。

その気持ちは、本当によく分かる。金魚すくいで初めての獲物だ。しかも苦労して捕ったものだ。更に言えば、子供であっても、今回の獲物がなかなか捕れないものであることは分かっている。なので、譲らない。そう、後先のことを全く考えなくてよいのは子供の特権なのである。

とはいえ子供も、小学校の高学年にもなると、これしきのことではさすがに泣かない。けれども、何かに必死に耐えている様子は、傍目で見ても容易に分かる。なので親もひるむが、大人というのは子供と違って先を読む。しかも、現実的である。なので、ここで引くわけにはいかない。

そうしたやりとりを見かねてか、ふいに隣から、「じゃ

あ、じいじが飼ってあげるよ」と声がして、娘の顔は途端に明るくなった。母がまだ生きていた頃には横のものも縦にしなかったような親父である。どうせできないだろうと思い、反対をしようかとも思ったが、ここで飼育してくれる限りにおいては、金魚の死を見せなくてすむ。また、そもそも、その飼育の苦勞を我々がしなくてすむ。

父は早速、水槽と水草、水中ポンプから、カルキ吹きのためのハイポの用意まで、何とか仕上げて金魚の飼育に入った。それも、最も難関と言われる出目金である。けれども、こうして実家の水槽には、一匹の大きな出目金が泳ぐことになり、娘は帰省の度にそれを見るのを楽しみにするようになった。

娘は「出目クロちゃん」と勝手に名付けては、はしゃぐ。ときには弟と一緒にそれを絵に描いて、父に送る。実家に寄る度に、真っ先に水槽のところに行く。そして帰りにも、それが元気に泳いでいる様子確かめてから、安心して帰る。しまいには、「おじいちゃんのところに、出目クロちゃんを見に行こう！」と言いだす。そうこうしているうちに、自然と実家に行く回数が増えた。

母が他界して既に17回忌が過ぎた。けれどもこの家に再び、子供の声が響く。そして一度は全ての子供が巣立ち、一旦はカラになったこの巣に、再び子供の声が響く。その様子を、齢とともに細くなった目を更に細めて、もはや老人となった父が見つめていた。そしてそれは、笑っているようでいて、泣いているようでもあった。

ともかくにも、現実的な大人の家に、後先を考えない子供の声が響く。それは目の前の現実であるようでいて、どこか懐かしいような、そんな顔をして一人の老人が見つめている。誰かが言っていた。「孫というのは、来ても嬉しいし、帰っても嬉しい」と。

そんなことが何回か繰り返されたある日、何の予告も無しに、ふらりと実家に寄ってみると、水槽の中の出目金がない。「さては、とうとう…」と思い、実家で家業を継いでいる弟に尋ねると、何とそれはもう今回で5回目ということであった。

けれども、父は適当に飼育していたのではなく、それはもう誠心誠意をこめて飼育をしていたらしい。それでも出目金は弱いので、どうしても死んでしまう。なので、隣の市にあるペットショップにまで行っては、そっくりのものを買ってくる。

それにしてもこんな、もし特許出願をしたなら一発で進歩性無しとして蹴られてしまうようなもの、いやおそらく数多くの先行例があるような取るに足らないアイデアを私はそれまで全く気付かなかった。

しかしながら、一体それが何なのであろう。金魚と格闘していた老齢の父は、明らかに生き生きとしていた。それは母が他界してから数年来、見たこともないような姿であった。

たかが金魚すくい。されど金魚すくい。けれども、どうやら娘によってすくわれたのは、金魚だけではなかったらしい。